

# DPRI NEWSLETTER

111  
2026.2

特集  
02

## 言葉を超えて、世界とつながる — 研究現場から見えること



スペイン語で拓く防災研究のフロンティア  
中野 元太

英国・リーズ大学への留学で見たこと  
野末 陽平

英語は下手でも仕事はできる  
林 宏一

My first year at Uji Campus  
JAMES Wilma

Connecting beyond language and culture  
in Japanese academia  
SABER Mohamed

### 連載

- 08 世界と結ぶ ⑫ KHUJANAZAROV Temur  
Uji Japanese language learning circle in DPRI
- 09 若手研究者から ⑬ 今井 優樹  
海洋観測と流動解析による気候変動の将来変化予測
- 10 新スタッフ紹介
- 11 DPRI 掲示板 受賞・表彰・就任／人事異動  
イベントレポート
- 12 研究発表講演会開催のお知らせ  
編集後記



京都大学防災研究所  
Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University

特集

# 言葉を超えて、世界とつながる — 研究現場から見えること

防災研究所では、国や地域、言語、文化的背景の異なる研究者や学生が集い、日々協力しながら研究活動を行っています。こうした多国籍な研究環境は、多様な視点や新しい発想を生み出す原動力である一方で、言葉や文化の違いによって、意思疎通が難しく感じられる場面も少なくありません。研究の進め方や議論の仕方、日常の何気ないやり取りの中にも、それぞれの背景の違いが影響することがあります。

本特集では、「研究者の言語・文化の壁」をテーマに、母語の異なる相手とどのようにコミュニケーションを取り研究を進めてきたのか、その現場での工夫や試行錯誤を紹介します。また、日本の大学や研究所で働く外国籍研究者が、言語の問題にとどまらず、文化や慣習の違いにどのように向き合ってきたのかについても取り上げます。防災研の内外で活躍する多様なバックグラウンドをもつ研究者の経験を通して、違いを乗り越えながら共に研究することの難しさと同時に、その先に広がる可能性や魅力について考えていきたいと思います。





# スペイン語で拓く 防災研究のフロンティア



中野 元太  
NAKANO Genta  
巨大災害研究センター  
准教授

## 言葉ができない時間を大切に

近年、海外とのオンライン会議にも同時通訳AIが導入されるようになり、外国語ができなくても、不自由なく旅や調査を進められる時代が近づいています。しかし、私は「言葉がうまく通じない時間」にこそ、その地域の文化を理解したり、現地の人々との友好を深めたりする機会が潜んでいると感じます。

研究職を志す前、私は2年間、中米エルサルバドルの市役所危機管理課で地域防災活動の推進に携わりました。事前にスペイン語の訓練を受けていましたが、すぐに話せるようになるわけではありません。職場や自主防災活動の会議では内容が理解できず、自然と相手の表情や仕草、周囲の出来事に注意を向けるようになりました。

観察を重ねるうちに、たとえば挨拶にも多様なパターンがあり、それが友好の度合いと深く関係していることが見えてきました。あるいは、市役所と地域住民との関係性——政治的力学、依存、信頼など——もわかってきました。こうした気づきは、災害時の地域避難体制構築の重要な手掛かりとなり、実際の大雨災害でも早期事前避難を実現しました。

スペイン語に不自由さを感じなくなったころ、ある地域住民の方に「あなたは最初、私たちの話をよく聞いてくれた。それがよかった!」と言われました。実際には、スペイン語が分からなかったのだから聞くことしかできなかったのですが、言葉ができなかったときの姿勢も信頼感の醸成につながっていたと気づかされました。

## 中南米は防災研究のフロンティア!?

日本と中南米は、地震・津波、火山、台風、土砂災害、洪水など共通する災害が多くあります。中南米諸国は経済発

展が進み、観測網の整備や防災対策への投資への関心も高まり、大学の研究レベルも向上しています。防災研究における新たなフロンティアと言える地域です。

一方で、大きな壁となるのが言語です。中南米の研究者も英語に苦手意識を持っており、英語を話さない研究者も少なくありません。さらに、防災研究では行政機関との連携が不可欠ですが、多くの行政官も英語を話しません。スペイン語ができることで、こうしたフロンティアへのアクセスが可能になり、協働研究の幅が大きく広がりました。

## 国際港湾都市を守る

そこで、日本、メキシコ、エルサルバドルの3か国による地震・津波複合災害に関する共同研究を立ち上げました。太

平洋に面する国際港湾都市の機能と人命をいかに守るかは3か国に共通する課題です。

しかし、立ち上げの過程はスペイン語の嵐でした。プロジェクト合意文書や関係省庁に対する説明文書、観測データ依頼文書など、先方の研究者も協力してくれますが、スペイン語で書かれた内容を確認する必要があります。そして文書のマナーやトーンもコミュニケーションの一要素で、AIに簡単にお願ひできるものでもありません。

こうして新しいフロンティアに踏み込んで始まった研究者同士の議論は共通の数式や理論、考え方を糸口に展開していきます。言語や文化が違って、深いところで研究はつながっていると実感しています。



エルサルバドルでの津波避難検討ワークショップ(2025年11月)



在日メキシコ大使および在日エルサルバドル大使との面談(2025年7月)



# 英国・リーズ大学への留学で 見えたこと



野末 陽平  
NOZUE Yohei  
地震災害研究センター/  
理学研究科 博士後期課程  
3年（学振特別研究員）

## 英国留学のきっかけ

「博士課程の間に海外で研究してみない？」と指導教員の深畑幸俊教授から留学を勧められたのが、修士2年の終わり（2023年3月）のことでした。それをきっかけに、研究分野が近い研究者が所属する英語圏の大学などを中心に、滞在先を探そうになりました。

私は、測地観測データから地殻の変形（ひずみ速度場）を推定する研究を行ってきました。それまではGPSデータのみを使用してきましたが、干渉SARという別の観測手法によるデータと組み合わせることで、より高精度な推定ができるのではと考えました。そこで、SAR研究の国際的な拠点である英国・リーズ大学のTim J. Wright教授の研究室に滞在することに決めました。

幸いにも日本学術振興会の若手研究者海外挑戦プログラム（現在は募集停止）に採用され、2025年4～8月の5か月間、現地で研究に取り組むことができました。

## 英語について

もともと英語には苦手意識がありましたが、英会話教室に通ったり、リーズ大学への受入れに必要な英語試験の勉強を進めたりするうちに、「話す必要性和度胸が

あれば、何とかできるのでは」と思うようになりました。

実際に現地で生活してみると、研究に関する話題については、専門用語など共通の背景知識も多いため、大きな支障は感じませんでした。一方で、日常会話については、共通の話題が少なかったり、相手によっては訛りが強かったりしたため、会話が続きず苦労することもありました。それでも、天気や旅行先、おすすめのビールといった身近な話題になると、会話が少しずつ弾むようになりました。教えてもらった場所を実際に訪れ、その感想を話してみることもありました。研究以外の何気ない会話が、現地での人間関係を築くうえで大切だと実感しました。

## 文化の違い

英国全体の傾向かもしれませんが、周りの人たちは仕事と私生活の切り替えがとても明確だと感じました。英国の祝日は日本より少ない一方、イースターや夏にはまとまった長期休暇をとる文化があります。ひとたび休暇に入ると、その間は基本的に連絡が取れなくなったり、大学自体が完全に閉鎖されたりすることもありました。

また、教員や大学院生の居室の壁はガ

ラス張りになっており、とても開放的な印象を受けました。研究生室は驚くほど広く、数十人が一つの大部屋で作業をしていました。同じ部屋の中に、干渉SARデータを解析して地殻変動について研究している人もいれば、岩石の元素分析や地質調査を中心に研究している人もおり、これらの分野を横断した議論も日常的に行われていました。

さらに、他大学から講師を招いてセミナーが開催されることも多く、大学間の垣根が低いと感じました。英国で地震や火山について研究している大学院生を集めた研究集会も開催され、私も参加しましたが、大学院生が中心となって研究集会が運営されていたことにも驚きました。こうした環境は、日本とは異なる研究文化として強く印象に残っています。



研究集会の巡検で訪れたクリフトン吊り橋



リーズの街並み



リーズ大学での研究室



# 英語は下手でも仕事はできる



林 宏一  
HAYASHI Koichi  
斜面防災学研究中心  
教授

私は今年で58歳になりましたが、このうち15年をアメリカで過ごしました。それに関わらず英語は下手で未だに英語の映画やドラマはあまり理解できないし、アメリカのレストランで注文しても聞き返されることはしょっちゅうあります。それでも何とかアメリカで仕事をすることができました。なぜ英語ができなくても仕事はできるのか？ そしてアメリカで仕事をするコツは？ このあたりを簡単にまとめたいと思います。

## アメリカ英語は許容範囲が広い

自分の英語を聞かれたり読まれたりするのが一番恥かしいのは、相手が日本人の時かもしれません。なぜなら、日本人はすごく英語の発音や文法に細かいからです。アメリカ人は驚くほど英語の文法や発音を気にしません。英語といっても、イギリス英語とアメリカ英語はかなり違うので、そもそも「正しい英語」が存在しません。また、アメリカは色んな国から来た人が集まって暮らしています。イタリア人はイタリア訛り、フランス人は

フランス訛り、中国人は中国語訛りで話します。したがって、日本人が日本語訛りの発音でしゃべっても誰も気にしません。アメリカに住んでいた時にちょくちょくシアトルで仕事をしていましたが、ある現場でいかにもアメリカ生まれといった感じの身体の大きな白人と仕事をしたことがあります。仕事の合間に雑談していた時に、「お前はシアトル生まれか？」と聞かれたことがあります。この下手な英語でアメリカ生まれのアメリカ育ちのわけないだろうと思いましたが、アメリカに住んでる人が英語の上手い下手を気にしない良い例だと思います。

## アメリカには外国人という言葉はない

日本に住んでいると、当たり前のように日本人と外国人という分け方をするのを耳にします。外国人を英語に変換するとForeignerという言葉ができますが、アメリカではForeignerという単語はまず使いません。なぜなら外国人という概念がないからです。アメリカで国籍

が日本であろうが、英語が下手であろうが、アメリカ市民と同じ気分で働いたり勉強したりすることができますが、これはとても心地の良いものです。

## 細かいことは気にせず大げさに褒めよう

言葉や国籍だけでなくアメリカの社会は細かいことを気にしません。アメリカに旅行してホテルの部屋に入ったら、コンセントのパネルを見てみましょう。日本では必ずまっすぐついています。アメリカではほぼ確実に少し斜めになっています。アメリカの社会が細かいことを気にしない典型的な例です。アメリカで仕事をしていると日本でよくある重箱の隅をつつくような細かい指摘をされることはまずありません。代わりにみんな褒めてくれます。ちょっとメールで質問に答えただけで「You are my angel!」などと喜んでくれたりします。私の長女はアメリカで生まれましたが、無事に出産を終えた妻に対して助産師さんが「Great job!」と満面の笑顔で褒めてくれたことが忘れられません。アメリカで仕事をする時は、細かいことを気にせず大げさに褒めましょう。



ニューオーリンズの現場でカリフォルニア州立大学やルイジアナ州立大学の研究者と

や出身に関わる概念で一番一般的なのはアメリカ在住の資格で、アメリカ市民、永住権、ビザ、ビザ免除(Esta)に大きくわけられます。ただしこれは、パスポートを申請したり、大学受験や就職したりする時に問題になるだけで、一般生活ではまず区別されません。日本人がEstaでアメリカに旅行した時でも、入国審査を終えた瞬間にアメリカ市民と同じように接してもらえます。国籍



27年前にアメリカで生まれた長女

# My first year at Uji Campus



ウィルマ ジェームズ  
JAMES Wilma  
広報出版企画室 特定職員

One of the greatest obstacles I faced after moving to Uji city, Kyoto, was the Japanese language. Of course I have studied the Japanese language some decades ago; and did use it upon completion of my studies; again, decades ago. But I never used Japanese at home nor during my tenure at the United Nations University (UNU), nor at my children's schools; even the radio channel we listened was in English. I lived completely in a non-Japanese speaking environment although I live in Tokyo.

I found myself thrown into a completely a Japanese speaking environment. The move to Uji alone was enough I thought – 500 kilometers from home. To be in a completely Japanese working environment was not in my bucket list. My Japanese communications skills were such that when I spoke with my colleagues in Japanese, they would not understand me. Nor could I effectively convey my message to them. There were quite a lot of misunderstandings. To add to that, all administrative documents that I needed to complete to confirm my employment were in Japanese. In the absence of an effective and structured staff onboarding manual, everything was too daunting. It really frustrated me to the core that I would burst into tears constantly. Language is like a tip of the iceberg when it comes to communication.

Enough pity partying, I said

and started to see this amazing campus sitting on the foothills of the mountains; the valley covered with world renowned matcha tea plantations and the Uji river that rolls endlessly. I acclimatized myself; and picked up my old Japanese textbooks; and started to listen to the radio in Japanese. But daily life is different. I navigated through the first year at DPRI due to the kind and generous support rendered by my immediate colleagues at the Public Relations Office. They would speak in simple Japanese, with gestures, interact or intervene when I am struggling or in trouble! and go to lengths beyond imagination to explain everything to me. At one point, S san, accompanied me to the South Kyoto Pension Office, in a faraway land, to find my pension details.

Japanese language is difficult. Although I may not understand completely the subject of the discussion or utter a completely comprehensible phrase in a stringing sentence, I have learned to listen and understand the nuance of it. Now I can understand and communicate a little better

than the time I arrived at DPRI, and interacting with my colleagues is quite interesting.

Moving to the Disaster Prevention Research Institute (DPRI), Kyoto University, is one of the best things that has happened in my life. I need to horn my Japanese language skills further so that I can play some tricks on my colleague M san, he is the genius in IT troubleshooting and everything; and enjoy the power of communication. As Prof. Virginia Murray would say in her favourite words, a language should be used; it is usable in any given situation; and only by its use, could one get the message through.



In a rice paddy field



Uji Campus at twilight



# Connecting beyond language and culture in Japanese academia



モハメド サベール  
SABER Mohamed  
水資源環境研究センター  
特定准教授

## From Egypt to Kyoto: research beyond language barriers

I came to Japan from Egypt in 2006, bringing my native language (Arabic) and my cultural background into an international research environment at Kyoto University. Over four years, I completed my PhD in Wadi Hydrology (Fig. 1). During this period, I gained valuable insights from Japanese culture while advancing my career and strengthening my international collaboration network. I met students and researchers from many countries, and these experiences strongly shaped my academic path and personal growth. From my perspective, language and culture are not obstacles to academic research or international collaboration. Instead, they can become a source of motivation and confidence for international researchers who choose to study and work in Japan. Cultural diversity strengthens research by improving communication and trust with partners across regions, including the Arab world. It also introduces new ideas and methods, helping Japanese universities expand their international collaborations and research impact.



Fig. 1 Wadi system in Arid regions

## Cultural and language diversity supports multidisciplinary research

Cultural and language diversity strengthens research by bringing

different ways of thinking and solving problems. In my case, my academic path has been multidisciplinary. I began in earth science, then moved into hydrology, covering flood risk management and climate change. More recently, I have focused on artificial intelligence, using machine learning and deep learning for water-related applications, especially flood prediction and hazard mapping. This broad experience helps build stronger international collaboration across regions. Over the years, I have supported and developed joint research on integrated flood and water management with partners in Algeria, Egypt, Tunisia, the USA, Oman, Saudi Arabia, Vietnam, the Philippines, and the UK. I believe that different backgrounds, cultures, and languages naturally expand research topics and strengthen teamwork. Ultimately, this kind of collaboration supports Kyoto University by increasing its international reach and research impact.

## Improving the research environment in Japanese universities

In recent years, I have led and contributed to research activities focused on machine learning for flood hazard mapping (Fig. 2), which is essential for protecting people, infrastructure, and property. As an Arabic-speaking researcher at Kyoto University, I have been able not only to advance research, but also to build a strong global network, especially across the Middle East and North Africa, as well as with partners in the USA, Europe, and Asia.

To further improve the research environment in Japan, regardless of cultural or language diversity, I recommend the following:

- Stronger support for international collaboration through conferences, workshops, and hosting international researchers and students (this strengthens research and helps cultures connect).
- More leadership opportunities for international faculty in committees, major projects, and educational initiatives (clear pathways improve global competitiveness).
- Better support for newcomers, including simple bilingual guidance and a peer “buddy” system, especially for those still learning Japanese.
- Smart use of AI tools: AI can strengthen research productivity and efficiency in many applications including academic research, along with translation and drafting, but lasting collaboration still depends on human trust and cultural understanding developed through direct interaction.

Kyoto University can rise further globally through excellent research and sustained international collaboration that turns diversity into long-term strength, and I will continue working toward this with strong motivation.

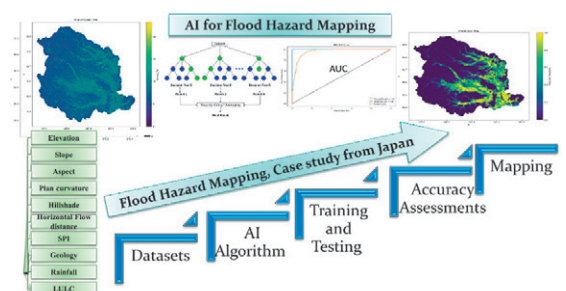


Fig. 2 Example of machine learning applications for flood hazard mapping



## Uji Japanese language learning circle in DPRI



ティムール フジナザロフ  
KHUJANAZAROV Temur  
水資源環境研究センター 特任助教



The “Uji Japanese Language Class” has been teaching for more than 30 years. Originally started in Uji city, the class began as a small learning club and has since grown into a lively weekly gathering that connects researchers, students, and staff from many countries.

In August 2022, members of Kyoto University’s Uji Campus, including international faculty and students from the Disaster Prevention Research Institute (DPRI), established the “Uji Japanese Language Circle” as an official DPRI activity. The circle aims to help international students at DPRI and the Uji Campus learn Japanese and feel more at home in Japan. Today, it meets weekly in DPRI facilities or online, providing a familiar and friendly space for learners. Classes cover all levels, from basic hiragana and katakana to advanced and business conversation.

What makes the circle truly special is the dedication of its Japanese teachers. Many of them prepare their own materials and adapt teaching styles to support the needs of each student, with some teachers supporting learners over decade. Their efforts provide not only knowledge, but also warmth and genuine interest. This long-standing commitment and experience make the circle a place where learners feel safe to ask questions, make mistakes, and grow.

The language circle is not just a place to study language, it naturally brings together students from different countries, cultures and backgrounds. Every year, the circle organizes cultural exchange events around holidays. These gatherings are a mix of performances, food, and presentations, where members introduce their traditions

through songs, dances, and stories, creating a cheerful international atmosphere.

The Japanese Language Circle has greatly contributed to the international environment of the DPRI and Uji Campus. For many new students, it becomes the first friendly community they join, helping them adjust to both language and culture. Members often say that the classes gave them greater confidence to participate in discussions, communicate with colleagues, and manage daily tasks more smoothly. This shared learning experience helps to create new connections across laboratories and institutions and supports collaborative environment at DPRI and the Uji Campus.

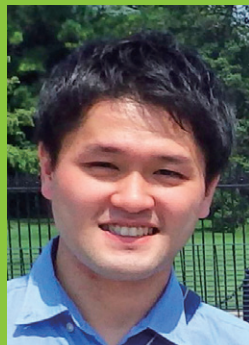
I first joined the class in 2015 as a student struggling with hiragana. With the patient guidance of Japanese teachers, I gradually improved, and later joined the team. Today, I continue helping the circle at DPRI, and remain grateful for how much it has given me. For me, the benefits go far beyond language learning. The relationships built through these weekly meetings have supported my life in Japan in many unexpected ways, from improving daily communications, understanding culture, and making new friends. In this sense, the circle is not only about studying Japanese but also about building a community that extends into both academic work and everyday life.

The Uji Japanese Language Circle remains open to all learners, regardless of level or background. Anyone who wishes to improve their Japanese, meet new people, or simply enjoy a friendly hour each week is welcome. I hope this brief introduction encourages more students and researchers to join us and continue the tradition that began in 1994.



## 若手研究者から ②③

防災研の将来を担う、准教授・助教・研究員・博士課程学生ら  
若手研究者による研究を紹介します。



今井 優樹

IMAI Yuki

気候変動適応研究センター  
大気・海洋モニタリング  
研究領域 白浜海象観測所  
助教

海洋観測と流動解析による  
気候変動の将来変化予測

## 白浜海象観測所とは

私は、防災研の隔地施設である白浜海象観測所で海洋観測やデータ解析、沿岸域の海洋流動解析を行っています。この観測所は特徴として、紀伊半島南部（和歌山県白浜町）の田辺湾沖合5kmに設置された着床式の観測塔（田辺中島高潮観測塔）を管理・運用しています。観測塔は太陽光パネルを有し、海洋の波高・波向・波周期や水温・塩分濃度、大気の日射量・風速・風向・気温・気圧などの連続観測を行い、長期観測データを取得することが可能です。水深の深い沖合で通年のデータを蓄積できる日本でも貴重な一施設です。

## 観測データ紹介

観測塔で得られた水深5.0m、10.0mの30年間分の水温観測データを紹介します。図1は 海洋上層の水深5.0m（青線）、下層の水深10.0m（オレンジ線）の1994～2023年（30年間）の水温時系列変化で、水深5.0m水温の一次回帰直線（赤線：変化トレンドを直線に変換して表したもの）と共に示しています。水温が夏季に高く冬季に低下する年変動が捉えられ、夏季は上層5.0mの方が明瞭に高く、水深5.0mと10.0mの間の躍層（水温・塩分濃度が急激に変化する層で、海洋表層が温かくなりやすい夏季は特に顕著に現れる）をうかがい知ることができます。水深5.0m水温の一次回帰直線（赤線）はほぼ横ばいで（10.0mも同傾向）、過去30年間の観測から観測塔

付近は気候変動の昇温傾向は見られませんでした。世界平均では海洋水温は100年で約1度程度の昇温が観測されており、今回の観測塔データは世界平均と異なるトレンドを示したため、気候変動による水温変化の空間的不均一性が示唆されました。

## 気候変動による将来変化予測

観測データは数値モデルの構築にも活用します。数値シミュレーションの計算結果と観測データを比して数値モデルの精度検証を行いより精度の高い数値モデルを構築します。構築した数値モデルで将来予測計算も可能で、一例として図2に田辺湾の表層水温の将来変化量（2100-2004）を示します。空間全域に昇温傾向が見られますが、湾口部に渦のような模様が現れ湾奥部より強い昇温傾向が予測されています。このように観測所では、沖合の観測データ取得から数値モデルの構築、構築したモデルを用いた気候変動の将来変化予測などの体系的な研究を可能にしています。

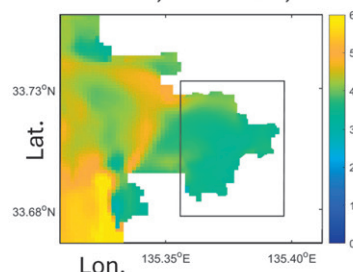
MRI-CGCM3, temp[deg. C]  
Level=20/20, 2100-2004, Jul.

図2 田辺湾の表層水温の空間分布：将来変化量（2100-2004年）

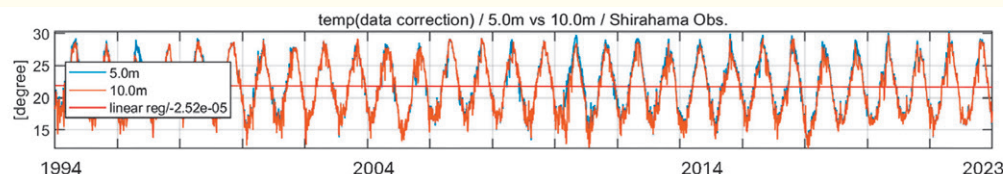


図1 水温時系列変化(1994-2023年)青/オレンジ【水深5.0m/10.0m】赤【一次回帰直線】

## 新スタッフ紹介

### 加納 将行

地震災害研究センター  
准教授

学生時代を過ごした、また研究者になるきっかけを与えてくれた、京大に戻ることができて嬉しく思います。地下で起きている変動のモニタリングのための、地震や地殻変動データの解析手法開発を主に行っております。

出身地 兵庫県

趣味 旅行、野球観戦、おいしいもの食べること、街歩き



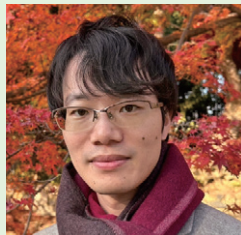
### 高館 祐貴

気象・流域災害部門耐風構造研究分野  
准教授

専門は風工学で、風洞実験や数値流体解析（CFD）を主な手法として建築物に作用する風を扱っています。雪深い上越で生まれ育ち、仙台、つくばで過ごしてきました。京都での生活に早く慣れるとともに、多様な文化・音楽・研究に充実した生活が送られればと思います。

出身地 新潟県上越市

趣味 ピアノ、ヴァイオリン、ヴィオラ、国内旅行



### 桑原 正人

気候変動適応研究センター寄附研究部門流域土砂マネジメント研究領域  
特定講師

これまで治水、防災、土砂管理等の業務・研究を遂行してきました。その経験を活かして、実流域に適用可能かつ効率・効果的な土砂災害対策技術等の開発に取り組みます。そのため多くの方と共同するとともに、恩送りできるよう機会創出にも努めます。

出身地 徳島県

趣味 バイク、釣り、山歩き



### Vaiciulyte Sandra

地震災害研究センター地震情報研究領域／巨大災害研究センター巨大災害過程研究領域  
助教

I research human behavior during earthquakes and fires. I hope to contribute to improving safety through an interdisciplinary perspective.

出身地 Grew up in Lithuania, lived in Great Britain and Mexico

趣味 I love coffee and cycling in the city on Sundays, and pottery



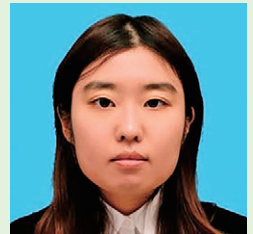
### 中下 早織

気象・流域災害研究部門災害気候研究分野  
助教

数値シミュレーションと観測からもっともらしい状態を推定するデータ同化を用いて、台風や線状降水帯などの極端気象の予測可能性に影響を与える要因の解明に取り組んでいます。幼少期から憧れていた防災研究所で研究に携われることに深く感謝し、多くの皆様と協力しながら、研究生活を楽しみたいと思います。

出身地 千葉県千葉市

趣味 数理パズル、アニメ鑑賞



### 鳥井 千恵

気象・流域災害研究部門水災先端計測研究分野  
支援職員

ご近所の方に紹介されて気付けば6年目です。設備の少ない環境ですが、桜が満開になる時期には、敷地内で花を眺めながら昼食をとる時間が楽しみです。悪戦苦闘しつつも職場の皆様に助けられ業務に取り組んでいます。

出身地 岡山県

趣味 映画鑑賞、音楽鑑賞、コーヒー



### 岡田 孝子

技術室  
支援職員

成果発表されるポスター印刷対応や宇治・隔地施設で研究支援されている技術職員さんのサポートをしております。技術職員さんたちの多岐にわたるひらめき☆彡には毎回感動させられるばかりです。

出身地 京都府

趣味 旅行・スポーツ観戦





## DPRI掲示板

## 受賞・表彰・就任

所属等は受賞当時のもの

矢守 克也 教授

日本災害情報学会 会長(第13期)就任

[2025年12月14日～2年目の定時総会の終了日]

後藤 浩之 教授ほか

土木学会地震工学論文賞

[2026年1月]

## ■受賞論文

「剛塑性応答をプリプロセスに用いた計測震度の修正案  
—2023年トルコ・カフラマンマラシュ地震による検証例—  
(土木学会論文集、81巻、13号(2025年7月発刊))

峠 嘉哉 特定准教授、

Chenling SUN [工学研究科D2] ほか

土木学会地球環境委員会

2025年度地球環境論文賞(JSCE GEE Award)

[2025年9月26日]

## ■受賞論文

「2021年西宮林野火災を対象とした林床の残存有機物の熱重量  
示差熱分析」土木学会論文集、Vol.80、No.27、24-27007、2024

佐山 敬洋 教授

令和7年度

水文・水資源学会学術賞

[2025年9月18日]

## ■受賞理由

降雨流出氾濫モデル(RRIモデル)の開発および応用に  
関する一連の研究に対して

Chang, C.W. 前助教(現米国ロードアイランド大学助教)、

森 信人 教授

The Coastal Engineering Journal  
Citation Award of 2024

[2025年11月26日]

## ■受賞論文

Chang, C.W., N. Mori (2021) Green infrastructure for the reduction  
of coastal disasters: a review of the protective role of coastal forests  
against tsunami, storm surge, and wind waves, Coastal Engineering  
Journal, Taylor & Francis, Vol.63, Number 3, pp.370-385.

山本 悠 [工学研究科M1]、志村 智也 准教授、

森 信人 教授、宮下 卓也 助教

土木学会海岸工学論文賞

[2025年11月26日]

## ■受賞論文

「F-net常時微動観測における2次脈動から台風高波の統計  
的推定」土木学会論文集B2(海岸工学)、2025年81巻17  
号、論文ID: 25-17216

中村 亮太 非常勤研究員

令和7年度河川基金

優秀成果研究者・研究機関部門

国土交通大臣賞

[2025年8月22日]

## ■受賞研究

「流水型ダム貯水池における堆砂量と  
その質に関する考察」

長谷川 夏米

(工学研究科D2)

2025年

地域安全学会論文奨励賞

[2025年10月25日]

## ■受賞論文

「災害拠点病院での水害タイムラインの  
策定と実運用による実証」地域安全学会  
論文集、No.47、2025

Lin Kun-Sian

(工学研究科D3)

倉田 真宏 准教授、Yutaro Kawasaki (卒業生) ほか

The 2024 Best Paper Award, Japan Architectural Review

[2025年8月]

## ■受賞論文

Kun-Sian Lin, Masahiro Kurata, Yutaro Kawasaki, Yoshio Kitatani for "Investigation  
of low-disturbance seismic retrofit method for steel column bases using curved  
members", JAPAN ARCHITECTURAL REVIEW 7.1 (2024)

Lin Kun-Sian

(工学研究科D3)

2025年度

京都大学建築学専攻若手奨励賞

[2025年5月22日]

## ■受賞理由

若手奨励賞にふさわしい優れた業績

## &gt;&gt;&gt; 人事異動

\*教授・准教授・助教・職員(それぞれ常勤・特定・特任)について掲載。名称付与は新規のみ掲載。

[2025年9月1日]

・地震災害研究センター地震情報研究領域 加納 将行准教授/採用

[2025年10月1日]

・気象・流域災害研究部門耐風構造研究分野 高館 祐貴 准教授/採用

・気候変動適応研究センター流域土砂マネジメント研究領域 竹林 洋史 特定教授/採用  
←河川防災システム研究領域 准教授より

・気候変動適応研究センター流域土砂マネジメント研究領域 桑原 正人 特定講師/採用

・気候変動適応研究センター水災先端計測研究分野 鳥井 千恵 支援職員/採用

[2025年10月31日]

・巨大災害研究センター国際災害情報ネットワーク研究領域(外国人客員)  
RADIANTI, Jaziar 客員教授/任期満了

[2025年11月1日]

・巨大災害研究センター巨大災害過程研究領域・地震災害研究センター 地震情報研究領域  
VAICIULYTE Sandra 助教/採用・気象・流域災害研究部門災害気候研究分野 中下 早織 助教/採用  
←特定研究員(特任助教)より

・技術室 岡田 孝子 支援職員/採用

[2025年12月1日]

・気象・流域災害研究部門水災先端計測研究分野 松本 知将 助教/採用  
←水資源環境研究センターダム再生・流砂環境再生技術研究領域 特定助教より

## EVENT REPORT

## 平等院見学会

2025年11月25日、防災研究所文化レクリエーション事業として、平等院と鳳凰堂の内部を見学しました。平等院は1052年に、関白藤原頼通が父・道長から譲り受けた別荘を寺院としたことに始まります。鳳凰堂と庭園は阿弥陀如来の西方極楽浄土を象徴するとされ、1994年には世界文化遺産に登録されています。午前中



鳳凰堂前にて

は雨が降っていましたが、午後には天気が回復し、澄んだ青空のもと、紅葉の美しい庭園を歩くことができました。参加者は14名で、

宇治観光ボランティアガイドクラブの方に案内していただき、建物

の特徴や装飾の意味について理解を深めました。また、附設の博物館「鳳翔館」では、鳳凰堂創建当時の内部を復元した展示を見学し、生前の行いにより阿弥陀如来の来迎が九段階に分けられるとする九品来迎の思想についても学びました。見学後は平等院表参道で各自お土産を購入し、現地で解散しました。留学生も多数参加し、日本の歴史と文化を知ってもらう良い機会になりました。

(西川 友章)



紅葉に囲まれた平等院の梵鐘

## 令和7年度 京都大学防災研究所 研究発表講演会を開催します

2月19日(木) 9:30~18:30

【プレナリーセッション】開会の言葉 堀智晴所長

### 特別講演

角哲也特定教授

「ダムを、「賢く」、「増やして」、「永く」使うために  
～継続は力なり・10のエピソード～」

【パラレルセッション】口頭発表／ポスター発表コアタイム

2月20日(金) 9:30~16:00

【パラレルセッション】口頭発表／ポスター発表

### 【プレナリーセッション】

#### 災害調査報告

西嶋一欽教授

「令和7年9月5日に静岡県牧之原市・吉田町等で発生した竜巻  
の被害調査報告」

峠嘉哉特定准教授

「2025年大船渡市林野火災と山林の復興」

サメ アハメド カントウシュ教授

“Understanding Extreme Flood Dynamics: Post-Flood  
Field Assessment in Central Vietnam and Northern  
Luzon (Philippines)”

#### 所長表彰（技術支援）および技術支援報告

長岡愛理 専門職（技術）

「海外での地震観測」

中本幹大 専門職（技術）

「宇治川オープンラボラトリーにおける技術支援の取り組み」

閉会の言葉 矢守克也副所長



京都大学防災研究所  
Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University

令和7年度

# 研究発表講演会

2026年 2月19日 木 20日 金

京都大学宇治キャンパス 一部ネット中継

後援 一般財団法人 防災研究協会

受付：きはだホールホワイエ／プレナリーはネット中継します

詳細はQRコードから  
ご確認ください



### 編集後記

研究活動の中で英語を使わざるを得ない場面は研究者にとって数多くあります。しかし、研究を始める前から英語で不自由なくコミュニケーションが取れていたという人は、決して多くないのではないのでしょうか。私自身も大学院生の頃は、英語でたった数行のEメールを書くのに数時間、場合によっては半日近くかけて、「これで本当に伝わるのか?」「失礼な表現になっていないだろうか?」と考え続けていました。今回の特集を通して、母語以外の

言語を流暢に使いこなしている方々も、さまざまな環境の中で試行錯誤を重ねた結果、現在の技能を身につけてきたのだとあらためて感じました。やはり、言語や文化の違いに向き合うことも、一歩ずつの経験の積み重ねが大切なのだと思います。本誌が読者の皆さまにとって言語や文化への理解を深めるきっかけ、そして新たな挑戦への小さなモチベーションとなれば幸いです。

(宮下卓也)

「DPRI Newsletter」のほかに、こちらからも防災研の情報がご覧になれます。



ホームページ

<https://www.dpri.kyoto-u.ac.jp/>



YouTubeチャンネル

<https://www.youtube.com/@dpri-ku>



Facebookページ

<https://www.facebook.com/DPRI.Kyoto.Univ>



X

<https://twitter.com/dpripitwit>



メールマガジン（登録ページ）

[https://dpriicon.dpri.kyoto-u.ac.jp/mailmagazine/mailmagazine\\_user.php](https://dpriicon.dpri.kyoto-u.ac.jp/mailmagazine/mailmagazine_user.php)

京都大学防災研究所

Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University

編集／京都大学防災研究所 広報・出版専門委員会、広報出版企画室 発行／京都大学防災研究所

〒611-0011 宇治市五ヶ庄 Tel: 0774-38-3348 (代表) 0774-38-4640 (広報)

ご意見・ご要望はこちらへ ..... [toiawase@dpri.kyoto-u.ac.jp](mailto:toiawase@dpri.kyoto-u.ac.jp)

2026年2月発行